

911.3

11"

元祿三年秋年 暮と 伊賀守 兼 若狭守 孫
薦 志 誰人 心 花 春

神 路 山 西 河 津 志 志 志
増 賀 志 志 志

何 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志
孫 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

二 見 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志



一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、



六八八

六八

雪はあ~~~~湖の~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~



古詩集卷之...

小舟のたも乃きあかきとて昭若村乃板屋女座の
花のまうしおきあひやう流やう

うたふーや竹のさかやがさか人の来

愚按 澤 巖 日記 におよ

四條河原に納涼きとて書つて縁結びけ流を
夕月夜にさうさうあかきとて川中流を
なうとてあまの川にさかきとて女を
まもるもあまの川にさかきとて

あまの川にさかきとてあまの川にさかきとて
あまの川にさかきとてあまの川にさかきとて
あまの川にさかきとてあまの川にさかきとて

河風やいさなとてあまの川にさかきとて

古今和歌集

古今圖書集成



月見もやと船を笠田の浦にこもる
待もあともなへ月はしとて
いそがしかなしぬ仲秋の月
深遠の山に雲は
しよふなほそはあまの
標干によろこ水由玉塔の
あまにふた佛の光り

鑑明の月はしよふなほそはあまの

古川入江圖



三松を唐に江戸に歸り信を電におちり
給ふ一由又門人の言に...

此の言はるるも... 靈祐松尾...

元禄又申年江戸に春字を之給ひて

余くや猿にませ... 猿松面

數人可ぬ屋... 杉松

此の言はるるも... 杉松松尾...

杉松松尾の...

枝打戸南... 杉松松尾...

深... 杉松松尾...

深... 杉松松尾...

名... 杉松松尾...

此... 杉松松尾...

此... 杉松松尾...

此... 杉松松尾...

此... 杉松松尾...

ふた山中石村の類本うゝあゝゝゝゝゝ

よゝゝや河川ち橋た道い作たゝゝ

あゝゝゝあゝゝゝあゝゝゝあゝゝゝ

えゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゝ乃ゝゝゝゝ

人も見ぬ素やかゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

西行たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

河川たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

川上やゝゝゝゝゝゝゝゝ

えゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きりぎりす

甲つ及器能るるきぬるあはるる

屋張にるるあはるる

きりぎりす代々小田能りも

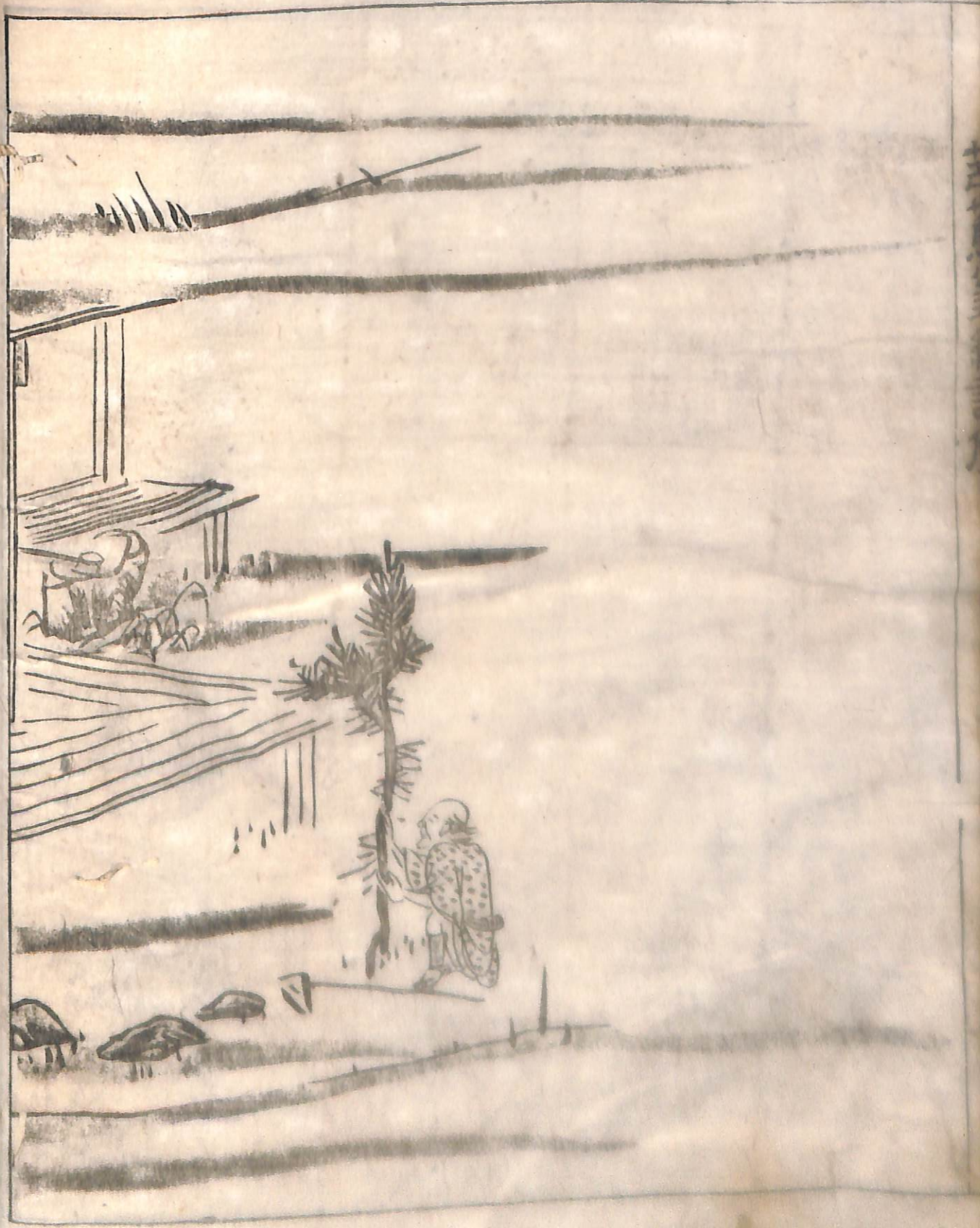
伊加る能る雪とる許におきせり

松とるは能るる

きりぎりすに即ち能る枝る



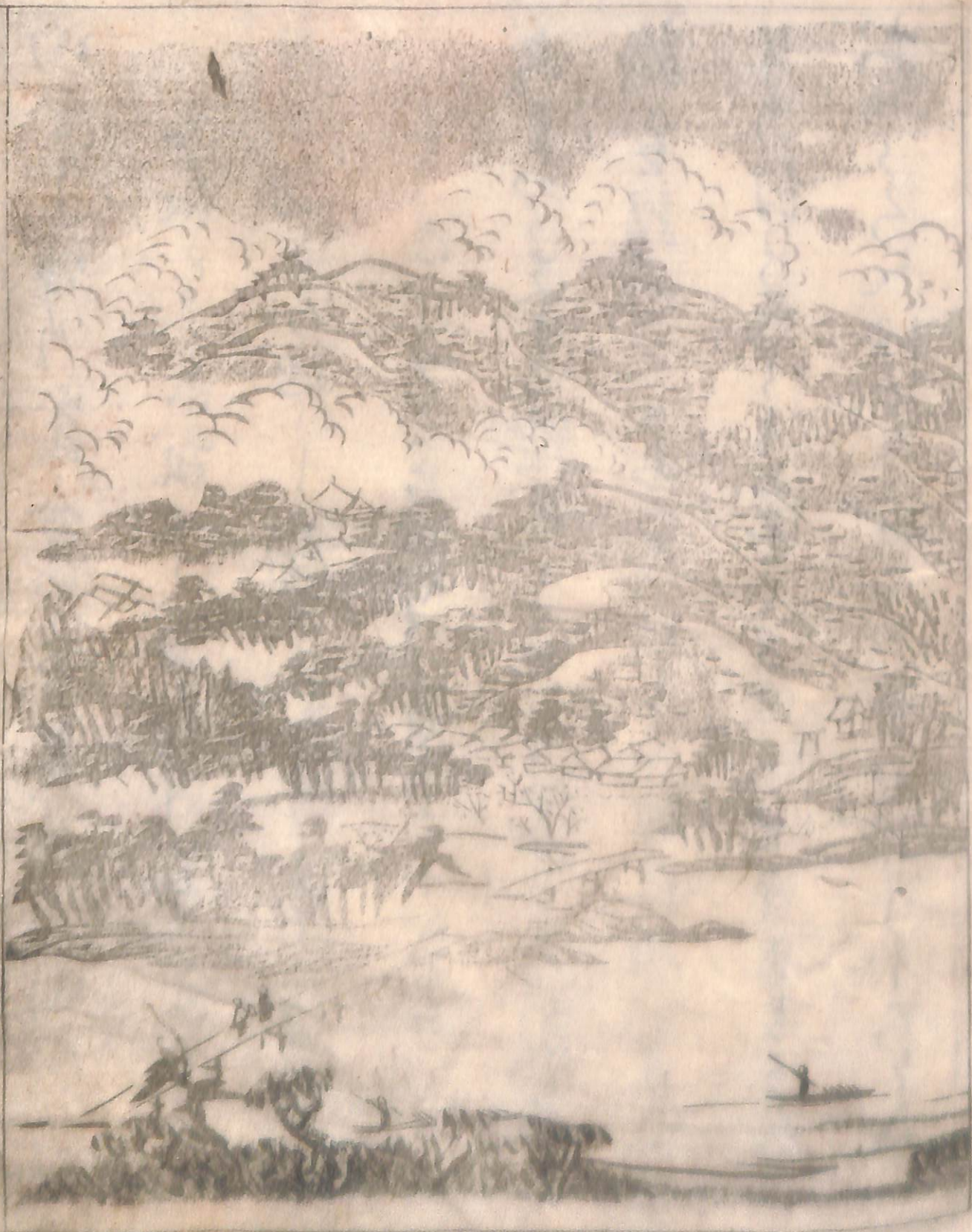
Vertical text on the left margin, likely a chapter or page title.



嵯峨乃小倉山なる常寂寺にまゝと
松林を添えてや 風はかおる

おふ〜く大堰河はるやうさ〜くお〜志願ひて
と月や山峯を〜お〜

あし山



旧里に帰り益會の事と交結し時

之家とて杖を白髪に垂す事あり

月夜に同く一圃におきし

とて心も静かに月夜に十三年

九りの支考竹花をまゝしつゝに難波の如く

旅立程より六十年の長に都花九百と見ゆ

たゞし何れも遠くをゆく生も世との人に

おこしとて身はよのあはししちりなく

海由の事とて借し支考惟然に抱く

しつゝあはれとてしる難くゆゑあはれ

とてあはれとてあはれとて横海の事

あはれとてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとて



明社ハ垂陽ノあり

菊能香也。奈良にき。吉ノ佛も

十三夜能月。奈良に信。ナ市にま。能

外。羅く。ナ。別。カ。老。月。見。奈

古。出。奈。以。信。ナ。カ。ナ

ナ。カ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ

此。秋。カ。何。ナ。ナ。雲。ナ。ナ

三十日能。汝。ナ。泄。痢。ナ。病。ナ。ナ

忠。也。ナ。多。以。物。乃。カ。ナ。ナ。ナ

ナ。カ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ

奈。来。カ。刀。カ。ナ。ナ。カ。カ。大。津。ナ。ナ

奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈

大。奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈

難。波。奈。ナ。ナ。痛。の。奈。ナ。ナ。ナ

ナ。ナ。の。ナ。心。神。の。ナ。ナ。ナ。不。浄。を

け。カ。カ。人。を。ナ。ナ。招。手。を。ナ。ナ

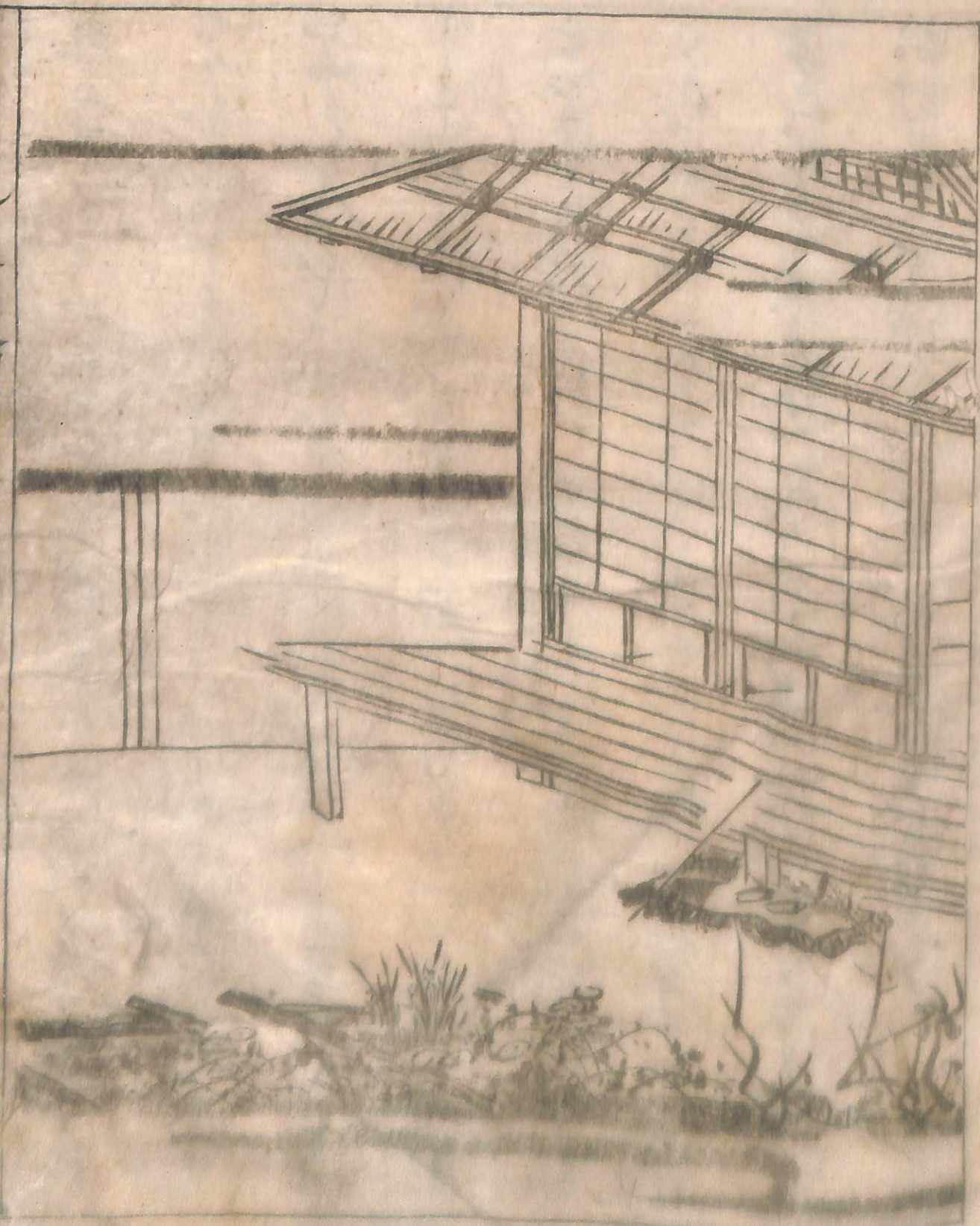
古。人。會。同。書

十月五日此朝より南の御堂に静坐すに
くくくくくくくく

愚拙は家花燈仁を信すといふ
別存すて今不あり

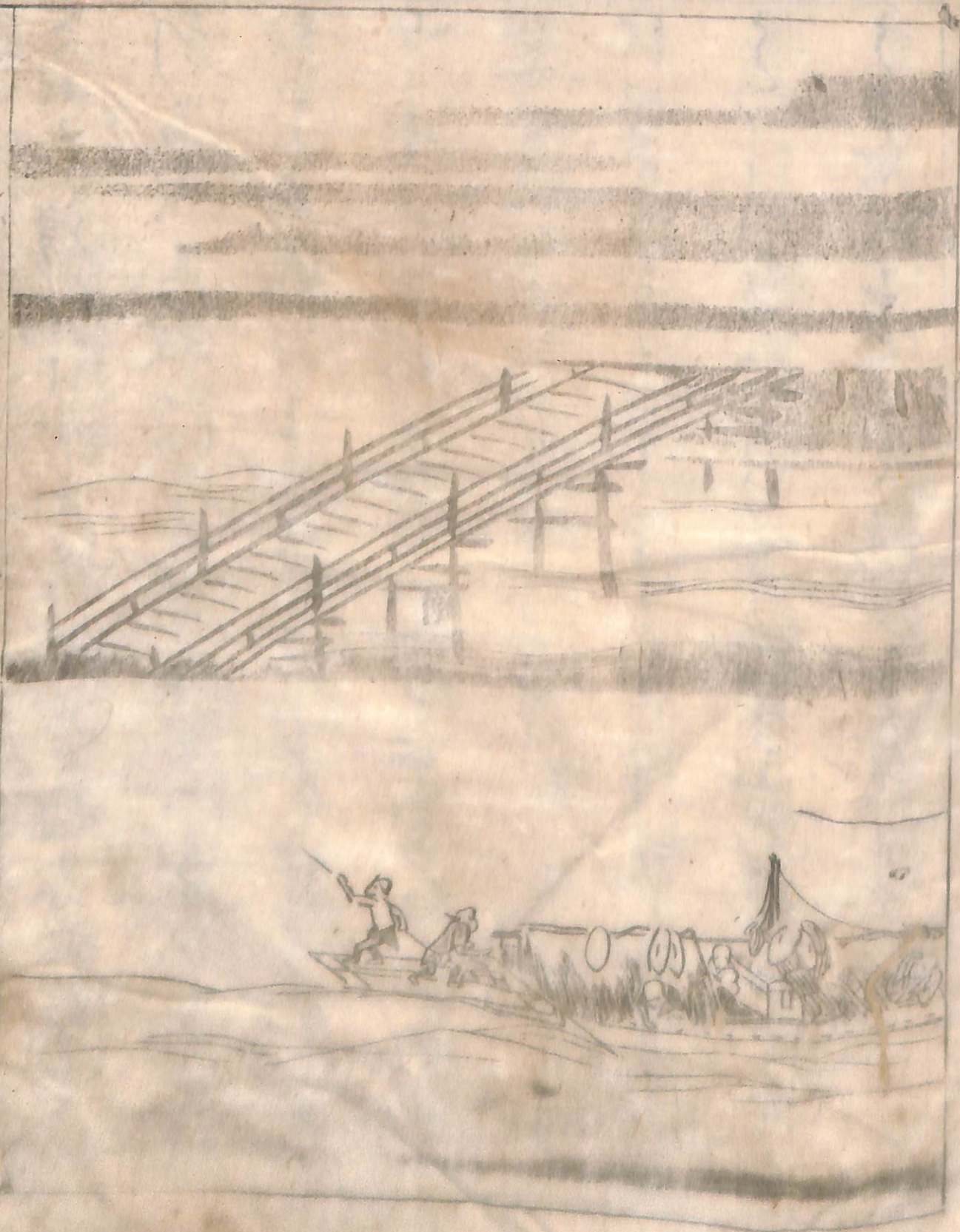
八日此朝ふけてかきとくくに居る香舟と云
抄のくくくくくく 頌う墨書する音のしげき
明のくくくくくく 人くくくくくく 於母あり
旅く病く多くと枯野をわけぬる
まの枯野をくくくく心くくくく
くくくくくくくく 乃くくく 風雅のくくに
くくくくくくくく

死を世よりくくくくくく 思ふくくく 生死の
一大事くくくく 置かすくくく 念く
古のくくくくく 名而くく 物くくく けり
けりくくく 山くく 空鳥の聲にけり
古社を佛乃安念くくく けり
今を身に於て侍るけのくくく 生おの
祝詞くくく けり 思ふくくく
かくくくく けり けり



香を焚きて安んずるに
 申すははらに給ふ社を
 祀祭るはけし久矣
 五十一等なりは如く
 納るはおのくに高人
 川船に如くはせし
 妻の貞子に次高き
 乙女はあはれに
 袖をたはしめて

袖をたはしめて
 乙女はあはれに
 妻の貞子に次高き
 川船に如くはせし
 納るはおのくに高人
 五十一等なりは如く
 祀祭るはけし久矣
 申すははらに給ふ社を
 香を焚きて安んずるに



此本傳所載高昌府探志其面く
りちるゝ類波うり伊勢北志きりゝる種
那れハちれ路きこゝて回ゝりゝる
子ゝりゝるかゝりにけくおゝれゝるゝ
悲ゝるゝおれゆきゝるゝ

依刃よりあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

寺屋首會同專

寺名部目録

東海ふく島縣波大津ノ権ありり 技官は者
平ももも公朝とさきんふなり 招はきん
ちりちりありんまをたふる解人なり 法徳系
おはくくくくくくく松あり 柳ありりり
塚やなるたふら社あり むやうたありり
卯塔をさのひあり 壙きゆふあり 柳あり
こまこま新と植てあり ありありありありあり
凡そ寺ありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありあり



愚按芭蕉翁此三字乃石碑ハ其時ハ一僧丈牒ノ字ニ以テ其由
去来此輩建ぬ也ヤ廟此ゆり此石壇ハ百川院佛院僧
行狀乃碑文ノ角上老人彫刻也芭蕉堂ハ蕉翁八十歳此
むく一おり此銘多遠主一粟津文庫也而此ハ其所
成切寸

繪

法橋狩野正榮至信也

癸丑五月寫為

際夢師縮狩野正榮原図少子前白

定之

田傳武也

心乃家者之乃因縁也於此社
与堂臨る能古の餘あり年太子ら心之學あり
之也未あれハ色之集あり乃風之積り神也
之集ありあ一あり安臨之し其の能なり
たふハ年一美清老々ハ女伴也其國ハ
ふありれ浪るあり津ふ終り粟津ハ
寺ありそありあり在り之ハあり乃あり
来ハ一幸也臨りあらね教あり久

此の如く人乃んて其の...
 ...の如く其の...
 ...の如く其の...
 ...の如く其の...
 ...の如く其の...
 ...の如く其の...

...
 ...
 ...
 ...

佛...

...

寶政五年癸丑歲四月

湖南業二井口保孝應需書



蕉門俳諧書林

井筒屋兵衛

橘屋治兵衛



Vertical handwritten text on the left side of the rectangular frame, possibly a library or collection number.

